

長崎大学薬学部の薬学教育・研究に対する外部評価

長崎大学薬学部では、内部質保証の一環として、薬学教育（6年制・4年制課程、大学院）および研究、組織および運営、ならびに施設設備の状況などについて自己点検・評価し、第三者の視点から点検・評価頂き、今後の本学部における薬学教育・研究の改善に活用することを目的に外部評価を実施した。

[実施委員会]

薬学教育自己点検評価委員会

メンバー：薬学部評価委員会委員7名、下記の学外委員4名

[学外委員]

高倉 喜信（京都大学白眉センター長）

大山 奈津子（ノバルティスファーマ(株)開発本部薬事、本学6年制課程卒業者）

秋吉 隆治（長崎県薬剤師会専務理事）

斉宮 広知（長崎県福祉保健部薬務行政室室長）

[評価スケジュール]

- ・令和6年6月 薬学教育自己点検評価委員会 設置
- ・令和6年12月 自己点検評価書および関連資料の事前評価（書面審査）
- ・令和7年1月14日 薬学教育自己点検評価委員会（Web会議）開催
- ・令和7年1月 評価結果の公表（薬学部HP）

[評価項目]

- 1 教育研究上の目的と三つの方針
- 2 内部質保証
- 3 薬学教育カリキュラム
- 4 学生の受入れ
- 5 教員組織・職員組織
- 6 学生の支援
- 7 施設・設備
- 8 社会連携・社会貢献
- 9 研究
- 10 学生の受け入れ（大学院）

[評価方法]

●五段階評価とコメント（総評と各評価項目）

【評価の段階】

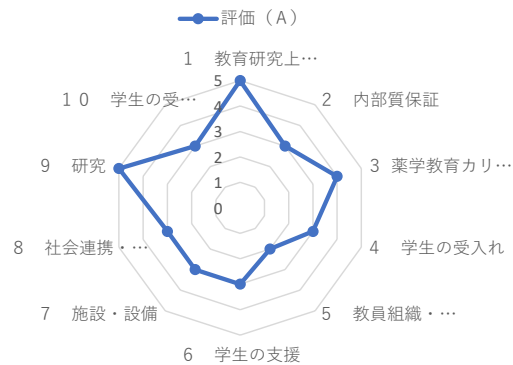
- 5：高く評価できる
- 4：やや高く評価できる
- 3：妥当である（普通）
- 2：やや不適切である。
- 1：不適切である（改善を要する）

外部評価結果

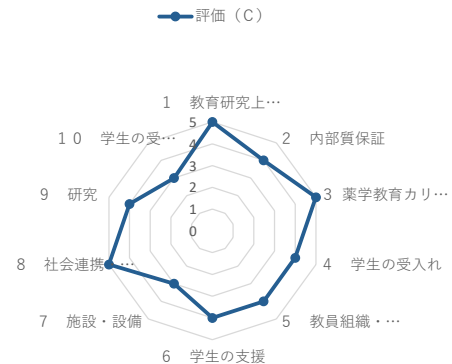
[各項目の五段階評価]

評価項目	評価委員				平均値
	A	B	C	D	
1 教育研究上の目的と三つの方針	5	5	5	3	4.5
2 内部質保証	3	5	4	4	4.0
3 薬学教育カリキュラム	4	5	5	4	4.5
4 学生の受入れ	3	5	4	3	3.8
5 教員組織・職員組織	2	5	4	3	3.5
6 学生の支援	3	5	4	3	3.8
7 施設・設備	3	5	3	3	3.5
8 社会連携・社会貢献	3	5	5	4	4.3
9 研究	5	5	4	3	4.3
10 学生の受け入れ（大学院）	3	5	3	2	3.3

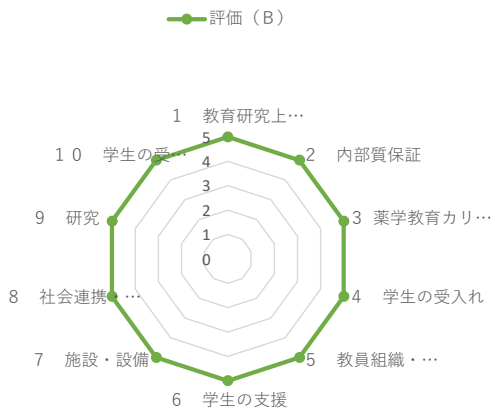
評価者（A）



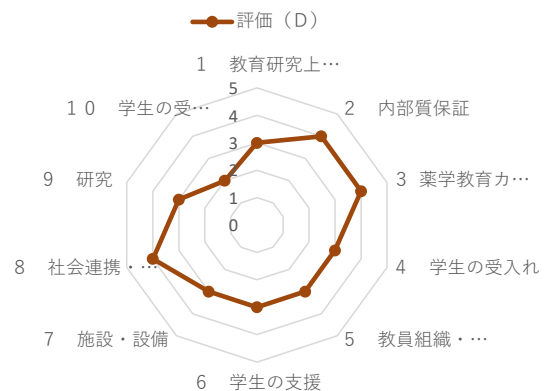
評価者（C）



評価者（B）



評価者（D）



[各項目のコメント]

項目	コメント
1 教育研究上の目的と三つの方針	・学生便覧を拝見したが良く理解できた。他にもきめ細やかに作成されていると思います。(評価員 A) ・教育研究の目的が社会に求められているものを反映しており、2つの学科の目的やカリキュラムの方針も明確である。(評価員 C) ・職員や学生への周知が HP や学生便覧で徹底されている。(評価員 C)
2 内部質保証	・教育・研究活動の自己点検・評価の機会を設け、教育・研究活動の向上の機会を設けることは評価できる。(評価員 C) ・具体的な成果・改善等が目に見えて分かりづらいつと感じた。(評価員 C)
3 薬学教育カリキュラム	・医療系教育については高く評価できる。教養課程で医療系以外の他学部との交流が少ないのではないかと感じます。総合大学のメリットを生かすカリキュラムもあつて良いかと思います。(評価員 A) ・ポリシーに沿った教育カリキュラムが適切な時期に提供されている。(評価員 C) ・OSCE や CBT 対策が手厚いと思う。(評価員 C) ・長崎大学ならではの医療実習は他大学と差別化ができていていると思う。(評価員 C) ・卒業研究への頑張り度合いは、研究室・学生に依存し、内容にばらつきがあると思う。(評価員 C)
4 学生の受入れ	・学力のみならずコミュニケーションを評価する面接試験を取り入れているところを評価する。(評価員 C) ・薬学科で博士課程まで進学する人材の確保の方策について、今後期待したい。(評価員 C)
5 教員組織・職員組織	・基幹教員 25 名(薬学科)で、大学設置基準上の 25 名(薬学科)を上回っているとのことであるが、研究を生業とされている先生方が兼務される業務が多いように思います。(評価員 A) ・教授を公募とし、教育や研究業績を重視している点は評価が高い。(評価員 C) ・人員配置として全体的に足りているのかは少し疑問がある(何年も欠員がある分野のポストはあると認識している)。(評価員 C)
6 学生の支援	・今時は集団で行動することを良しとしないのかもしれないが、上級生と交流し学部の雰囲気を感じることが有用であると同時に後輩を指導する能力を育成できると思います。(評価員 A) ・オリエンテーションや修学支援体制は整っている。(評価員 C) ・キャリア支援が十分かどうかは定かではない。企業等の就職に関しては、関東・関西圏に比べて、依然として不利だと感じる。(評価員 C)
7 施設・設備	・必要な設備は整っている。(評価員 C) ・文教・坂本 1・坂本 2 と拠点を転々としなければならないことは、動線が悪く、時間のロスであり、不便極まりないと思う。(評価員 C)

8 社会連携・社会貢献	・将来薬剤師を目指す方を増やすために、小・中学生、高校生を対象とした魅力ある公開講座は継続して行ってもらいたい。(評価員 A) ・海外大学との交流機会を継続的に提供し、グローバル人材の育成に貢献している。(評価員 C) ・7団体で協力し地域医療に貢献している。(評価員 C)
9 研究	・研究者として日々の研究に費やす時間が確保できているのか、学部が2か所に別れていて、研究スペースは十分に確保されているのかが心配な点です。(評価員 A) ・特に、「優れた点」に記載されている研究室等において、論文投稿・学会発表・表彰や、外部資金の獲得等が多くなされていることは評価できる。(評価員 C) ・また、学生に研究の機会や意識づけのために、「科学実験マイスター」の制度や特別研究奨励金の支援等を実施している点も評価が高い。(評価員 C)
10 学生の受け入れ(大学院)	・アドミッションポリシーは適切に規定・周知されており、一定以上の学力を担保するように設定している点は評価できる。(評価員 C) ・博士後期課程の入学定員充足率を上げる施策の成果に関して、今後期待したい。(評価員 C) ・すべての研究室で研究活動・指導が熱心に行われているのかどうかは、疑問点ではある。(評価員 C)

[総評]

評価委員	総評
A	学生便覧は薬学部のホームページから簡単に入手でき、3つのポリシーについても理解しやすい環境が整備されています。これは在学生のみならず、保護者にも安心感を与えるとともに、貴学部を目指す学生のモチベーションを高める資材としても重要だと思います。また、他大学の事例は把握しておりませんが、現在貴学部で実施されている海外の大学との交流プログラムは非常に優れたカリキュラムであると感じます。さらに、薬学教育カリキュラムにおいて薬学共用試験や薬剤師国家試験の合格率向上だけを目的とした編成ではなく、能動的学習を支援する体制が整備されている点は大変評価できます。加えて、早い段階で医療系学部間の交流を行っている点は、将来の実務において有用であると考えます。 実務実習においては、長崎市内の病院や薬局を活用し、事前学習が十分に行われた優秀な学生が多いという印象を受けています。一方で、コロナ禍により同級生とのコミュニケーションが不足し、患者との対話スキルに課題を抱える学生も一部見受けられました。このような学生を減らすための対策も必要かと思われます。学生支援については健康面での配慮が十分なされており、また就職に関しても卒業生は全国の製薬企業、病院、薬局に就職していることから、今後、地域枠の学生のほか、長崎で就職し地域で貢献する薬剤師を増やすため、地域の病院・薬局が就職説明会に積極的に参加できる体制を検討いただければと考えます。 最後に、長崎薬学コンソーシアムは社会連携の観点から非常に有用であると思います。地域を活用する新たな事業を企画し協働できればと思います。進行中の地域との研究事業として、簡易心電計を活用した心房細動スクリーニングの取り組みは、薬剤師の職能の開拓、さらに実臨床においても極めて有益な役割を果たしていると感じます。

B	学生を受け入れる組織体制が万全で、教育に係るプログラムはもちろんのこと、人格教育への取り組みや研究室への受入体制なども充実しており、全てにおいて高く評価できると考える。
C	教育研究上の目的や方針については、特段追加する点はないと思われる。教育研究上の目的を達するために、カリキュラムが組まれており、実習等のサポート体制は手厚いと思う。 また、離島実習や海外大学（ニューメキシコ大学、チュラロンコン大学）との交流機会を継続的に提供している点は、長崎大学の強みと言える。 研究面においても、近年外部資金を獲得する研究室が増えており、今後長崎大学薬学部での研究業績を多く出していくことが期待され、それにより博士課程等の大学院への入学希望も増えるのではないかと期待される。 学生の受け入れに関しても、より目的に合った学生の獲得に関する方策がなされてはいると思うので、その成果が出ることを期待したい。 施設が3拠点に分かれていることは、唯一評価できない。行動に制限がかかり、時間の制約も生じるため、学生・教職員の双方にとってメリットがほとんどないと思われる。なるべく拠点を集約することを今後検討してほしい。
D	いずれの基準および観点も満たしており、適正な教育研究活動を実施していると評価できる。 教育においては、在宅ケア、離島実習などの特徴ある授業や低学年から継続して研究マインドを涵養するための授業を組み込んだカリキュラムを実施している点は評価に値する。令和7年度入学者からは、総合評価に対して学修ポートフォリオ入力率100%および学部長指定のボランティアを必要条件として設定する予定であり、さらなるカリキュラムの充実を期待したい。一方で、薬学科における薬剤師の資格を取った上で博士号までを取得する人材が極めて少ないという問題を解決することは重要な課題である。 社会連携・社会貢献については、学部独自で中国薬科大学、ニューメキシコ大学、チュラロンコン大学など海外の大学等との学術交流協定・学生交流覚書の締結を積極的に進め、海外の学部生・院生の招聘や海外大学への学生派遣を積極的に行っていることは評価に値する。今後も継続的に取り組むことが期待される。 研究に関しては、学術変革研究(A)、基盤研究(A)や基盤研究(B)、挑戦的研究(開拓)等の科学研究費取得や日本医療研究開発機構（AMED）の事業に採択されるなど、競争的資金を獲得している。得られた研究成果は国際的に評価の高い学術論文を含め原著論文として発表しており、概ね良好な研究活動を展開している。